第77回 日本産業衛生学会が開催

「多様化する職域保健ニーズに応える」をメインテーマに

企業の経営形態や就労状況の変化にともない、職域における保健ニーズの多様化が急速に進んでいる。このため、産業保健の現場では、新たなニーズへの取り組みが模索されている。4月13日から16日の4日間にわたって、名古屋市の名古屋国際会議場で開かれた第77回日本産業衛生学会総会（企画運営委員長　井谷徹名古屋市立大学大学院教授）では、「多様化する職域保健ニーズに応える」をメインテーマに、多数の講演や報告、シンポジウムなどが催された。学会には約2300人が参加し、働く人たちの疾病予防や健康づくりのあり方、今後の展望や戦略などについて、活発な討議が行われた。

今回の学会では、6題のシンポジウム、3題の特別講演、4題のフォーラム、31題の特別報告の他、177題の一般口演や357題のポスター発表などが行われた。

このうち、メインシンポジウムでは、「多様化する職域保健ニーズへの対応」（座長　井谷徹教授、河野啓子東海大学教授）が企画され、井谷教授が「雇用・労働形態の多様化と産業保健活動」について、加藤隆康氏（トヨタ自動車）が「労働力の高齢化と産業保健活動」について、埋忠洋一氏（UFJ銀行）が「職域保健ニーズの多様化と対応策」について、武田繁夫氏（三菱化学）が「裁量労働者への産業保健サービス」について、酒井一博氏（労働科学研究所）が「職域保健ニーズの把握と職場改善」について、それぞれの取り組みや考え方を報告し、今後の産業保健の課題や対応策などについて熱心な討議を行った。

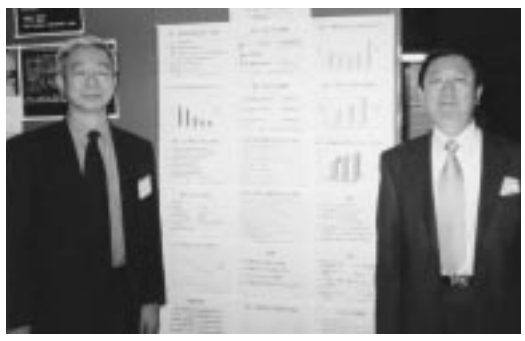
いっぽう、特別講演では、Jorma Rantanen国際労働衛生会議理事長が講演を行い、ヨーロッパにおける産業保健ニーズの多様化に対する取り組みを紹介した。

また、大久保利晃産業医科大学学長は「産業保健サービスのあり方と専門職の育成」と題して、多様化する産業保健ニーズに対応できるような産業保健専門職の育成について、その方法論や将来展望など、最新の知見に基づいた講演を行った。

シンポジウムでは、「健康職場―メンタルヘルスの1次予防」（座長・栗岡住子住友金属工業保健師、小林章雄愛知医科大学教授）と題してメンタルヘルスが取り上げられ、変貌する労働環境下でのメンタルヘルス対策、精神科医から見た職場組織とメンタルヘルスの課題、メンタルヘルスにおける産業保健サービスのあり方、産業保健担当者と企業との相互協力のあり方などが報告された。

さらに、ポスター発表では、石川俊次氏（ソニー健康開発センター）が関東産業健康管理研究会での成果をまとめて「生活習慣病と作業関連疾患の接点に関する議論」を発表し、本会の三輪祐一総合健診部長も共同発表を行った（**写真上**）。また、本会のVDT健診の問診データをもとに、阿部眞雄東海大学教授が「ゆとり」とストレス症状の関連性について検討した結果を「仕事の快適化に寄与する『ゆとり』マーケティングの可能性について」と題して発表し（**写真下**）、本会の森恵美子健康運動指導士も共同発表した。

なお、メインシンポジウム「多様化する職域保健ニーズへの対応」については、後日掲載の予定。



血液生化学自動分析装置を導入　本会

糖尿病関連項目の充実を図る

わが国の糖尿病の患者数は、生活習慣や社会環境の変化にともなって激増している。こうしたことから、糖尿病は健康日本21の重点項目の1つとして取り上げられ、発症の予防、早期発見と検診後の保健指導の徹底、合併症の予防などの取り組みが急務とされている。

本会では、かねてより糖尿病関連の検査や事後指導を行ってきているが、検査体制のさらなる充実のため、このほど最新鋭の血液生化学自動分析装置（JCA-BM9030、日本電子製＝**写真**）を導入し、設置した。

この装置は、糖尿病の検診に欠かせないヘモグロビンA1cやグルコースなどの血液生化学検査を自動で分析するものである。従来の装置で必要だった前処理操作が不要となったことや、処理能力を落とさずに、1つの採血管から血球成分と血漿成分を同時分析できるようになったのが特徴で、ヘモグロビンA1cについては、毎時1200検体の高速処理が可能である。これにより、従来に比べて検査時間が短縮され、より効率的な自動分析が可能となった。

本会では、この装置の導入にあわせて、血液生化学科の全面改修を行い、検診体制を拡充した。同科の関係スタッフは「ユーザーの健康づくりに活用していただけるよう、今後も精度管理や迅速処理を徹底したい」と述べている。

東京思春期保健研究会

平成16年度総会と研修会を開く

東京産婦人科医会の有志メンバーと日本家族計画協会、本会が協力して運営している東京思春期保健研究会（本多洋会長）の平成16年度総会が4月24日、東京・四谷で開かれ、前年度の事業報告や今年度の事業計画、研究会の今後のあり方などが話し合われた。

総会に続いて研修会が開かれ、北村邦夫日本家族計画協会クリニック所長が「性教育の新しい課題―親と子のコミュニケーション」のテーマで、赤枝恒雄赤枝六本木診療所院長が「子宮がん検診を20歳から―その背景を読み解く」のテーマで講演を行った。

このうち赤枝院長は、子宮頸がん検診の対象年齢が引き下げられた背景にあるのは、子宮頸がん発症に関係しているとされるヒトパピローマウイルス感染の若年層での急増問題であると述べ、思春期の性の問題や性教育にどのように取り組むべきかなどが示された（**関連記事1面から3面**）。

お知らせ

第196回 ヘルスケア研修会

これからの健康診断

8月からは、こう変わる

7月14日（水）午後2時～4時
東京・永田町「星陵会館」

第196回ヘルスケア研修会が7月14日（水）午後2時から4時まで、東京・永田町の「星陵会館」で開かれる。「これからの健康診断―8月からは、こう変わる―」をテーマに、吉田勝美聖マリアンナ医科大学教授が講演する。司会は、江崎良晴みずほ銀行大手町健康開発センター所長。

会場の「星陵会館」は、地下鉄各線「永田町」「国会議事堂前」「溜池山王」「赤坂見附」駅下車、徒歩10分以内のところ。

当日会場受付で参加費2000円を支払えばどなたでも入場できます。定員先着400名。

人・往来

●韓国健康管理協会研修団が本会を訪問・研修

本会と長年にわたり交流を続けている韓国健康管理協会の研修団一行12名が4月19日から24日まで訪日した。一行は4月20日、本会を訪れ、施設および各事業を見学した。

また、4月23日には同会の金相仁会長と金用燮情報資料課主任が、本会の情報処理課を訪れ、見学した。

●中国安徽省地域保健・地域検診活動セミナー研修団一行が本会を視察・研修

家族計画国際協力財団（ジョイセフ）では、5月6日から23日の18日間、日本の地域保健活動の視察研修を目的とした中国安徽省地域保健・地域検診活動セミナー研修団10名を受け入れた。その一行が5月13日、14日の2日間、本会を訪れ、本会の事業を研修し、施設を見学した。

●産業医科大学学生の現場実習を受け入れ

本会では、毎年産業医科大学の学生の現場実習を受け入れ、産業保健活動のさまざまな分野について、その実際を研修してもらっているが、今年は3名の学生が5月10日から14日までの5日間、本会で実習を受けた。

FUKUDA DENSHI
医療と健康をつなぐテクノロジー

学童検診業務の必携システム！

ECP-4641
医療用具承認番号:20800BZZ00230000

●学童省略4誘導、標準12誘導、心音図を自動解析
●心電・心音図検査を60人以上／時間のスピードで処理
●不整脈自動延長機能を搭載（学校保健法施行規則に対応）
●内蔵フロッピー装置、ICカード装置で収録データの再生可能
●成人病検診にも活用可能
※解析プログラムは学校心臓検診二次検診対象者抽出ガイドラインに対応
※検診業務に対応する専用パネル採用

フクダ電子ホームページ http://www.fukuda.co.jp　お客様窓口 ☎(03)5802-6600
●医用電子機器の総合メーカー
フクダ電子株式会社®
本社　東京都文京区本郷3-39-4　TEL (03) 3815-2121(代)　〒113-8483